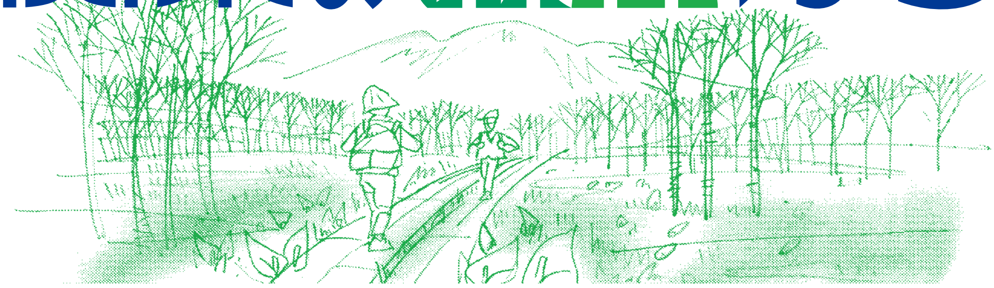
平成19年８月１日

第41号

関東の森林（もり）から



国民の森林・国有林

関東森林管理局
前橋市岩神町4-16-25
TEL (027)210-1158
FAX (027)210-1159
http://www.kanto.kokuyurin.go.jp/

ニッコウキスゲが満開の大江湿原（尾瀬）
（撮影：群馬署　菊池　昭次氏）

特集 … 百年先を見通した美しい森林づくりの積極的な推進
森林整備課

私の視点　「林野がイヌワシと地球を救う」
新潟県イヌワシ保存研究会
代表　柳川 雅文 氏

森林官からのおたより
磐城森林管理署　葛尾森林事務所
森林官　松井 健吾

広報「関東の森林から」は、日本の森林を育てるため間伐材を使用しています。

百年先を見通した美しい森林づくりの積極的な推進

森林整備課

近年の森林・林業をめぐる状況は、地球温暖化防止等に向けた森林整備に対する国民の皆様の期待の高まりのもと、違法伐採対策や林業再生のための新生産システムなどの取組が強化されたほか、我が国の木材自給率も回復傾向にあるなど、国産材の復活に向けて明るい兆しが見えつつあり、まさに我が国森林・林業再生の正念場を迎えたとの声があがっています。

このようななか、昨年9月には新たな「森林・林業基本計画」が閣議決定され、安全で安心できる暮らしを支える「緑の社会資本」としての森林の恩恵を後世の人々が享受できるように、百年先を見通した、地域の特色やニーズに応じた多様で健全な森林づくりを推進していくこととされました。

ヒノキ一斉人工林を抜き伐りし、下層にヒノキ苗を植栽した複相林

さらに、地球温暖化防止のための森林吸収源対策について、先般、平成18年度補正と19年度当初の予算を合わせて７６５億円という追加的な財政措置が講じられました。これにより我が国森林の間伐等の整備を一層推進し、全地球的な課題となっている温暖化問題に対して森林・林業の分野から貢献していくこととしています。

密度調整の間伐を行った林
光環境が改善され、広葉樹が侵入しつつある

関東森林管理局としても、森林吸収源対策としての間伐強化や、新たな基本計画の方針の下での針広混交林化・広葉樹林化・長伐期化の推進による多様な森林づくりなどを通じて「美しい森林づくり」を図っていくこととしております。

具体的には、管内造林地約40万㌶のうち約９割に当たり、間伐や主伐の適齢期を迎えつつある37万㌶の森林について、以下のような考え方で整備を進めていくこととしています。

初めて行う間伐については、今まで奥地にあるなどの理由によって手が付けられなかったスギやヒノキ以外の造林地についても積極的に実施していくこととし、間伐木の利用が可能な箇所では将来の針広混交林への転換なども考慮しつつ列状間伐方式も取り入れました。なお、本数調整を主体とする間伐では、林床植生の改善や侵入した広葉樹の積極的な保残を図ることとしています。

ガラ場に成林した広葉樹の天然林

伐期に到達している人工造林地の伐採に当たっては、一度に伐採する面積をできるだけ小さくして、可能なところでは樹木を抜き伐りやモザイク状、列状に伐採するなどした後、植栽したり天然に生じたりした稚樹を育て、複数の樹冠層を持ついわゆる「複層林」や多様な樹種で構成された針広混交林や広葉樹林として育てて行くことにしています。なお、複層林では、間伐や抜き伐り、下木の植栽などを繰りかえし行うことによって、永続的に複層林型を保つ森林をつくることを最終目標としています。

カラマツを植栽した中に広葉樹がほどよく混ざり合って針広混交林となった林

新局長に 笹谷 秀光 氏
（7月10日付け）

着任あいさつをする笹谷新局長

7月10日付けで、山川雅典前局長が退任し、新局長として笹谷秀光氏が就任されました。

7月11日局長室で事務引継ぎが行われ、午後には大会議室で、両氏から次のようなあいさつがありました。

山川前局長は「農水省に入省し、林野庁の業務が出来たことは大変思い出となりました。一年足らずではありましたが国有林を、また、森林を愛する気持ちは誰にも負けないと思っています。

そういう意味で、これから国有林には大きな変化が訪れますが、皆さんも心を一つにして乗り切っていただきたい。」

また、最後に「一番嬉しかったことは、「森林(もり)のかるた」をいろいろな団体等の方と共に作ったこと。その中に一番好きな言葉があります。

それは、"林業は百年先の国づくり"です。

私たちの仕事は、まさに百年先の国づくりを皆でやっているのだという気構えと自信をもってこれからも歩んで行って頂きたい。」とのあいさつがありました。

笹谷局長からは「今日、このような大事な側面で、国民の関心の高い国有林で皆様と一緒に仕事が出来ることを非常に嬉しく思います。

私はキャッチフレーズとして、三つの「C」と一つの「R」を考えております。

まず、一つめの「C」はクリーンであります。「国民の森林」の緑という色が象徴するクリーンな環境とイメージを大事にして行くことが我々の仕事の原点の一つではないかと思います。

二番目は、コミニケーションであります。国有林の取組を国民の皆様に判って貰うためには、一方的な話でなく、双方向でなくてはならない。「美しい森林づくり」に全力で取り組むうえでも、現場現場で国民の皆様や関係者との間で、人とのふれあいが極めて大事だと思います。

三番目が、コンプライアンスです。簡単に言えば法を守る遵法と言うふうに訳していますが、これが極めて今問われています。是非皆さんは、一人一人の自覚として自分が公務員だ、コンプライアンスが必要な仕事の筆頭格だと思って頂きたい。

また、仕事を進めるうえで、法令に従って業務を行うことは、我々の仕事の全ての基本であります。

四番目は、「R」であり、リフォーム、改革です。

国有林野関係は話を聞けば聞くほど非常に厳しい改革に取り組んでこられ、更なる改革も進行中です。

改革にあたり、正に国民の財産である森林をまもるという原点に立って、皆さんと共に知恵を出しながら取り組んでいきたいと思います。

最後に、仕事の進め方に関してでありますが、古い言葉ですが、「報・連・相」があります。

これは、報告・連絡・相談、この3つを大事に皆様方それぞれの役割と全体の統一の取れた展開が計られることが重要だと思います。

この歴史と伝統のある関東森林管理局が発信源となって良き展開が生まれるように皆さんと共に頑張って行きたいと思っています。」とのあいさつがありました。

（総務課）

事務引継ぎ
左：山川前局長　右：笹谷新局長

関東森林管理局長　笹 谷 秀 光

〈略　歴〉

本　籍　北海道　28年5月24日生
昭51・3　東京大学法学部卒
昭52・4　農林省入省
平5・8　大臣官房秘書課監査官大臣秘書官事務取扱
平6・6　構造改善局中山間地域活性化推進室長
平7・7　経済局対外政策調整室長
平8・5　食品流通局市場課長
平10・7　畜産局牛乳乳製品課長
平12・4　食品流通局企画課長
平13・1　総合食料局国際経済課長
平14・4　技術会議事務局総務課長
平15・1　環境省環境管理局総務課長
平15・7　環境省大臣官房政策評価広報課長
平17・7　環境省大臣官房審議官
平18・8　農林水産省大臣官房審議官

平成19年度 国有林野事業職員定期表彰式

式典出席者と局幹部

平成19年度国有林野事業職員の定期表彰式が、6月21日（木）局で行われました。

今年度は、一級精勤賞（30年）25人、二級精勤賞（20年）21人の合わせて46人が受賞し、そのうち一級精勤賞者及びその配偶者が式典に出席して表彰を受けました。

山川局長からの「これまでのご尽力と事業への貢献に深く敬意と感謝の意を表します。」との式辞を受け、受賞者を代表して、山梨森林管理事務所の神長明美氏が「上司をはじめ先輩・同僚のご指導の賜であり厚く御礼申し上げる次第です。この良き日に家族と喜びを分かち合いたいと思います。」との謝辞がありました。

式典のあとも、30年間の思い出話の花があちこちに咲いていました。

一級精勤賞

（磐城署）	高橋　忠男
（福島署）	増子　誠一
	牧田　充礼
（福島署白河支署）	渡邉　義雄
	根本　明
（茨城署）	本間　清
	田口　寿弘
	齋藤　仁市
	佐藤　忠男
	野木　正晴
	渡部　正一
	金澤　實
	鈴木　洋一
	吉成　耕一
（塩那署）	笠井　和夫
（利根沼田署）	伊庭　和幸
	星野　博信
（吾妻署）	松田　昌博
（山梨森林管理事務所）	神長　明美
	近藤　光男
（東京事務所）	増田　茂
（東京神奈川署）	城　勝三
（企画調整室）	太田　茂
（総務課）	生方　隆司
（指導普及課）	丹藤　卓司

二級精勤賞

（磐城署）	平子　正清
（福島署）	伊藤　正彦
（会津署南会津支署）	飯沼　新
（棚倉署）	菊池　光広
（茨城署）	細小路勝人
	松本　仁
（塩那署）	鈴木　浩
（利根沼田署）	山田　久男
	生田目幸喜
（吾妻署）	稲葉　貢
	石栗　英人
（群馬署）	笠井　修一
	相馬　健次
	小椋　清一
（東京神奈川署）	安嶋　博志
（下越署）	中東　敏之
（埼玉森林管理事務所）	吉岡　哲也
	髙木　康子
（東京事務所）	柳下　英樹
（森林整備課）	藤田　博之
（治山課）	黒沢　幸一

謝辞を述べる
山梨森林管理事務所　神長明美氏

本年度こそ ゼロ災を願い

安全週間に入った7月2日（月）、ゼロ災の達成を願い、局長・部長による安全旗の掲揚と局幹部職員全員によるゼロ災コールを行いました。

国有林野事業安全週間のスローガン「**気づいたら　その場で注意　その場で改善　明日へつながる安全活動**」を実践すべく、全員が輪になって、指さしコールでゼロ災へ向けて決意を新たにしました。

（職員厚生課）

安全を誓い安全旗の掲揚する職員

赤谷プロジェクト近況報告

「第1回 赤谷の森フォーラム」を開催

7月8日（日）に、赤谷プロジェクトの地元であるみなかみ町で、赤谷プロジェクトの活動報告会が開催されました。この「赤谷の森フォーラム」と題した活動報告会は地域の皆さんに赤谷プロジェクトの取組を知ってもらおうと、赤谷プロジェクト地域協議会が中心となり、みなかみ町の後援を受けながら開催したものです。

フォーラムでは初めに、日本自然保護協会常勤理事の横山氏と東京農工大学准教授の土屋氏による「赤谷プロジェクトと日本・世界の生物多様性」と題したオープニングトークがあり、世界的な視点から生物多様性をめぐる動きが語られました。

続いて、赤谷ふれあいセンターから「赤谷プロジェクトの科学的取組と豊かな森の再生」として、プロジェクトが現在進めている調査等様々な活動の報告を行いました。

また、地域協議会や日本自然保護協会から、地域の皆さんが参加できる取組として「赤谷の日」や「ムタコの日」（水源の森を大切にする地域住民による活動）などの紹介があり、積極的な参加を呼びかけました。

今回のフォーラムは初めての開催でしたが、プロジェクトの発展には地域社会の支援・参加が必要不可欠であり、プロジェクトを地域の方々に理解してもらう重要な活動の一つとして、今後とも取り組んでいきたいと考えています。

「赤谷の森フォーラム」
オープニングトークの一こまです

試験地の更新状況を調査しています
（植生管理WG）

植生管理、渓流環境復元ワーキング・グループ（WG）の現地検討会を開催

植生管理WGでは、伐採指定箇所等を視察すると共に、現地検討会で「赤谷の森」の将来的な目標とする人工林や天然林についてイメージの共有を図りました。また、渓流環境復元WGでは、議論を通して、赤谷プロジェクトの意思が茂倉沢治山事業の設計・施工へ反映できるよう要望を取りまとめました。

さらに、これらワーキング・グループの活動と連動していますが、プロジェクトと外部関係者との連携という新たな活動が始まっています。

具体的には、研究者や大学生が「赤谷の森」を研究フィールドとして利用し調査をしていこうとする動きで、赤谷プロジェクトの活動をさらに深めていくためにも、研究者等の参加を積極的に進めていきたいと考えています。

「赤谷の森」に住む野生動物の説明を聞き入る生徒たち

利根実業高校生に対する環境教育を実施

今年も、昨年に引き続き利根実業高校生に対する環境教育を実施しました。利根実業高校は農業系と工業系の専門知識を習得するための実業高校で、新入生は農業系と工業系に分かれて入学し、2年生に進級する際に専門のコースを選択することになっています。赤谷ふれあいセンターでは、農業系の専門コースの一つである森林科学コースを選択する際の参考になるよう、1年生80人を対象に20人ずつ4回に分け、当センターの森林環境保全（生物多様性の復元）の取組を解説しました。森林に関わる仕事の一つとして当センターが行っている活動が、進路決定の参考になってもらえればと思います。

（赤谷森林環境保全ふれあいセンター）

利根実業高校の環境教育では、センター職員から猛禽類観察手法の説明がありました

各署便り

潮会で国有林の取組をPR

【天竜署】 7月10日（火）、第544回潮会例会が市内ホテルにおいて開催されました。潮会とは、浜松市に所在する国、県、市及び郵政公社、JR、JH、NTT、電力、各大学等45出先機関の長の集まりで、2ヶ月に1回例会として開催しているものです。

今回は約6年ぶりに天竜森林管理署が当番となったことから、最近の国有林を取り巻く情勢や取組内容等のPRには絶好の機会と捉え説明を行うこととしました。

市原署長の説明に熱心に耳を傾ける会員

先ず、市原署長より開会の挨拶を行ったあと、国有林の概要及び浜松市の水瓶的役割を果たしている天竜署の概要、そして昨年度策定された森林・林業基本法のポイント及び美しい森林づくりに向けた国有林野事業の取組や推進運動の状況、地球温暖化防止に当たり、森林は救世主的役割を果たしていることを説明しました。また、中国やインド等の経済の台頭やロシア材課税強化の動き等により、外材の価格が急騰しており、国産材の供給体制の整備が急務であること等木材需給についても説明するとともに、森林環境教育とモデルコースの紹介も合わせて行いました。

会員の皆さんからは、森林が重要な社会資本と改めて認識。今後森林に対する依存度が益々高まるだろうとの声が寄せられました。

（流域管理調整官　二村安平）

マメザクラ保護協議会設立に向け検討会開催

【伊豆署】 皮子平（約3、000年前の噴火口跡）は、カヤが生え周囲にはマメザクラの咲く、市民自慢の景勝地でしたが、数年前からマメザクラが衰退し始めました。

このため、市民からマメザクラを再生できないかとの声があがり、6月18日、検討会が開催されました。

4月27日に実施した現地調査の結果をもとに開かれたもので、調査に参加した伊豆市、環境省、環境保護団体などに県も加わり、16名が今後の対応等について意見を交わしました。

左が往年の皮子平　右が現在の皮子平

平成13年に県に依頼して実施した調査結果や今回実施した土壌の分析結果、シカ食害などについて意見交換が行われ、天城山皮子平マメザクラ保護協議会（仮称）の設立準備を進めることとなりました。

当署では、7月4日に森林総合研究所の専門家を招いてアドバイスを受けるなどこの問題に積極的に取り組み、情報をホームページに掲載していくこととしました。

（流域管理調整官　山部礼治）

「植樹祭」を開催

【棚倉署】 当署では、初夏の薫り漂う6月6日（水）、管内の那須道国有林において、「美しい森林づくり参加してみませんか。地球温暖化防止」を合い言葉に、平成19年度棚倉森林管理署植樹祭を、東白川地方町村会協賛により開催しました。

当日は、絶好の晴天に恵まれ、関係町村長をはじめ、地元の棚倉町立高野小学校五年生16人や一般の参加者等、約200人が参加しました。

当署長の梨本正昭が「地球温暖化防止を図り、美しい森林づくり・地域づくりを進め、奥久慈流域の緑化推進と林業発展に寄与していきたい」と挨拶し、次いで、開催地の棚倉町長藤田幸治町長が歓迎の挨拶を述べました。当署事業への永年の協力に対し、有限会社東白林業、奥久慈林業協同組合に感謝状を贈呈したあと、来賓の祝辞を受けました。

式典終了後、植樹会場に移動し、当署長、管内4町村長、県議会議員、県南農林森林林業部長、高野小学校五年生代表による記念植樹を行い、植樹上の注意、実演を行ったあと、

小学生による植樹

0．1㌶の会場に参加者全員で240本のスギを植樹しました。日頃縁のない作業に苦戦しながらも、一人で3、4本植樹する児童もいました。その後、式典会場のそばに設けられた昼食会場で豚汁とおにぎりでにぎやかに歓談後、参加者全員に記念のナツツバキを手渡し、植樹祭は盛況の内に終了しました。

（森林ふれあい係長　中原加奈子）

森林の整備と日本の文化にふれる中国人留学生

【吾妻署】東京都新宿区を拠点に活動しているNPO法人「森とでんえん倶楽部」では、年に4回（春2回、秋2回）、当署管内の白根国有林に設定されている「草津やすらぎの森」で森林整備作業を行っています。

今年2回目となる作業が、6月23日（土）昨日の雨が嘘のように晴れ渡る中で、日本語学校の中国人留学生29名が参加して実施されました。

真剣に作業をする中国人留学生

手鋸を手にするのは初めてという生徒がほとんどであるため、作業開始前に使い方や模範演技で説明し、木が倒れるときは「倒れるよー」と掛け声をかけるよう指導しました。

各班に分かれての作業では、流暢な日本語で伐採するたびに「倒れるよー」と掛け声が森林内にこだまするとともに、森の精気を体一杯に浴びていました。

「森とでんえん倶楽部」では、昨年実施した留学生たちの評価がよく、今年も実施する運びとなりました。次の日は、茶道や草津名物の「湯もみ」を体験し、日本の文化にもふれて楽しいひと時を堪能していました。

（技術専門官　湯田六男）

今年も妙高の森で体験林業

【上越署】7月6日（金）、当署と上越地域振興局は、上越教育大学附属中学校一年生120名を対象に体験林業を開催しました。森林SPコース、自然探索コース、炭焼体験コースの3コースに分け、当署では、五万戸国有林（妙高市）において、森林SPコース（間伐見学、下刈・除伐の体験）を催しました。

請負業者による間伐実演の見学では、間伐木の選木、伐倒時のくさびの使い方、チルホールによるかかり木処理の仕方について説明があり、チェーンソーで伐倒するたびに歓声があがっていました。

汗びっしょりでの下刈作業

また、下刈体験では、初めて持つ下刈鎌にこわごわと作業を始めましたが、徐々に慣れ、なかには木にからまったツルを丁寧に取り除く生徒もみられました。

更に、鋸による除伐体験では、伐倒方向を確認して緊張しながら鋸を引いていましたが、初めて木を伐る生徒も多いようで思うようにいかず、無事倒れると大喜びでした。ひとりで10本も伐倒した生徒や3本がやっとの生徒と様々でしたが、自分で伐倒した木からコースターや名札を作り記念として持ち帰りました。

体験林業を通して、「森林を育てることがこんなに大変とは思わなかった」「疲れたけど楽しかった」との声があがり、生徒達には貴重な経験となったようです。

（広報連絡官　佐藤量司）

「スカウトの森」で下刈作業

【千葉所】6月3日（日）、木更津市高塚国有林「スカウトの森」で、千葉市ガールスカウトの小学生23名とスカウトのリーダー等19名が参加し、下刈作業と森林教室を実施しました。

この「スカウトの森」は、自然・環境について関心を深めるための野外活動の場として、平成12年度にガールスカウト千葉地区協議会とボランティアの森として協定を結んだものです。スギをはじめクヌギ、モミジ等多くの樹種が植えられており、色とりどりのきれいな山になるのを楽しみにしています。

当日は天候に恵まれ、午前中は非常に暑い中での作業となりましたが、子供達は汗をふきふき、慣れない手鎌を使って一生懸命刈り払いを行っ

丸太切りに挑戦！

ていました。昼食後はミラーウォーク、丸太切、火起こし体験、飛ぶタネの模型作り等の野外でできる様々な活動を楽しんでもらいました。森林の中で草木の香りを感じながら、色々な体験に挑戦した子供達の、生き生きとした笑顔が印象に残った一日でした。

今後もガールスカウト千葉地区協議会と連携し、より多くの子供たちに森林の大切さや森林に関わることの楽しさを伝えていけたらと考えています。

（指導普及担当主幹　佐川亜樹子）

新潟大学農学部学生に国有林の経営を講義

【下越署】 新潟大学農学部、竹内教授（森林経営計画学）の依頼を受け、６月26日（火）に当署の白濱署長が、国有林の経営全般について講義を行いました。

農学部大学生に講義

国有林経営の現状については、これまで取り組んできた国有林野の管理経営の方向転換等（抜本改革から現状）を中心に講義し、つづいて、現在の国有林の姿を全国的・関東管内・新潟地区別に説明しました。

学生の中には、北海道及び山口県出身の学生もおり、署長の前任地であった北海道局国有林野のＤＶＤ紹介も行われました。

下越森林管理署としては、本年度重点取組事項としている

１ 職員の技術・知識のスキルアップの取組
２ 佐渡島での鬼太鼓の森づくり
３ 森林林環境教育の推進（小学校森林教室・署植樹祭・地元産業祭）

等をＤＶＤで紹介いたしました。

また、海外勤務の話題にも及び、意欲のある学生に対し、林野庁の入庁案内もしっかりＰＲしました。

（流域管理調整官　富樫仁栄）

「水保苗畑跡地」地域と一体で整備

【福島署】 福島森林管理署では去る６月30日（土）、地元土船地区の方々のボランティア支援を受け、雑草木の刈り払い等水保苗畑跡地の整備を行いました。

今回は、当署が示した整備計画を地元の方が理解され、地元からの協力の申し出により企画したもので、当日は早朝５時30分から、区長さんや５つの町内会、約70名の皆さんがそれぞれ刈払い機を持参して集結しました。

区長さんや署長の挨拶の後、町内会ごとに分散し、約１時間にわたり雑草木の刈り払いに汗を流しました。

今回のボランティア活動は、地元と森林管理署が相互理解を深めつつ、活動を通じて一層良好な関係を築ける良い契機となりました。

（広報連絡官　吉野和久）

苗畑跡地の刈払い

３年ぶりに森林教室が復活

【中越署】 ６月５日（火）、８日（金）に、「美しい森林づくり」運動の一環として、南魚沼市立北辰小学校学校林において、四年生80名（２クラス）を対象に森林教室を実施しました。

同小学校での森林教室は、中越地震災害復旧などのため平成16年以来３年ぶりの開催でした。

当日は、「今日一日、楽しく森林のことを学んで下さい」との署長挨拶の後、午前中は、紙芝居（森林からのおくりもの）、樹木・草花の観察、森林のはたらきの実験（裸地と森林との保水機能の違い）、午後は、「もっくん作り」などの木工教室を行い、子供たちは楽しい一日を過ごしました。

後日、子供たちから、たくさんのお礼の手紙を頂き、手紙には、「ゴミを捨てません」、「自然を大切にします」などの言葉が書かれており、森林教室を実施して良かったと職員一同強く実感したところです。

また、同小学校には、今秋に２回目の森林教室を計画しており、引き続き子供たちに森林の大切さを伝えていきたいと考えています。

（森林ふれあい係長　桜井　勝）

「森林のはたらき」の実験で
驚きの表情の子供たち

中学生が「職場体験学習」を学ぶ

【東京事務所】６月に練馬中学校３名、７月に深川第八中学校６名が職場体験学習のため来所しました。

実習は、初日にポケットコンパスによる木場公園内の測量と、その成果をもとに回転分度盤を使った製図と面積計算を行い、二日目は高尾森林センターの協力を得て間伐体験やベンチ作りなどを行いました。

また、初日にパワーポイントを使った森林教室を行い、森林の働きや地球温暖化との関係などについても話をしました。都内の子ども達は森林を見ることなく生活しているので、「話が難しすぎるのではないか」と心配しながらの講義でした。

先日、練馬中学校の生徒から「森林の大切さや、今起きている環境問題、それを解決する方法などがとてもよく理解することができました。

間伐の仕方や計測の仕方を学び、仕事の大変さがよく理解できました。

これからの生活に活かして、将来につなげていきます。」との礼状が届きました。

改めて教育の重要性を認識しています。

（連絡調整官　幾久正行）

ポケットコンパス測量を体験

赤谷森林環境保全ふれあいセンターとの連携による「事前森林教室」実施

【千葉所】７月11日（水）、千葉市立稲毛中学校で、二年生153名を対象に森林教室を実施しました。昨年度より群馬県にある千葉市の施設「高原千葉村」で自然体験学習を行っている中学校のうち、利根沼田森林管理署が実施する「林業体験」又は、赤谷森林環境保全ふれあいセンターが実施する「いきもの村自然体験」を現地体験プログラムとして選択した中学校を対象に、「自然体験の事前学習」と位置付け森林教室を行っています。

今回は稲毛中学校から、「自然と人間との関わり」「自然との共生に必要なこと」をポイントに学習をしたいとの要望があり、ビデオとスライドを使って、私達の暮らしを守る森林の働きや、木材を供給する人工林とその手入れ、千葉県に住む動植物等について説明し、日本の森林を守り育てる活動として、「美しい森林づくり推進国民運動」「木づかい運動」や、間伐材利用拡大のための「間伐材マーク」等を紹介しました。

この「事前森林教室」が高原千葉村での体験をより深めることに役立つことを期待し、より良いプログラムにしていきたいと思います。

（指導普及担当主幹　佐川亜樹子）

森林の働きをスライドで説明

林業請負事業等における労働安全確保に向けて

【天竜署】全国安全週間に伴い労働災害防止対策の一環として、６月12日（火）に、林業事業体13社、立木販売買受者６社及び当署事業担当者、森林官による「林業労働災害防止連絡協議会」を開催しました。

まず、局長のメッセージを伝達、未だ重大災害が発生している状況、事業者として「人命の尊さ」・「安全確保の大切さ」を説明し、重大災害の根絶と労働災害の未然防止を要請しました。

更に、林材業におけるリスクアセスメントを紹介し、各事業所で労働災害の未然防止に役立てるよう依頼しました。

次に、浜松労働基準監督署第二方面主任監督官から、管内の労働災害発生状況等の説明を受けました。

①労働災害の防止は、「事業主を含め社内一丸」となって労働災害防止活動をしなければ、実効ある防止対策にはならない。
②伐倒作業における基本動作を徹底すること。
③かかり木処理を適正に行うこと。
④熱中症に注意すること。
⑤林業機械は使用目的以外には使用しないこと。

等的確な指導がなされ、今後の安全活動に大いに役立ちました。

（広報連絡官　山本富夫）

林業労働災害防止連絡協議会

森林官からのおたより

磐城森林管理署　葛尾森林事務所
森林官　松　井　健　吾

自然豊かな葛尾村

当森林事務所は、福島県の東部、浜通り地区の阿武隈山地のほぼ中央に位置する葛尾村にあり、約4,820㌶の国有林を管理しています。村の大部分を山林が占めており、集落では農地、牧草地が多く見られるなど、貴重な里山の風景が広がっています。

管内を流れる葛尾川

葛尾村の見所としては日山（富士山が見られる最北の山・標高1,058㍍）や五十人山（標高883㍍）が挙げられ、いずれも大部分が国有林となっており、阿武隈高原中部県立自然公園に指定されています。

広々とした山頂に山ツツジが群生している日山では、日山神社が祀られており、村民の憩いの場となっているほか、毎年行われる山開きでは多くの登山客でにぎわっています。

一方、五十人山でも山頂の約1㌶にわたって広がる芝生に山ツツジやスズランが群生しており、天気が良いと遙か太平洋も見渡すことができることから、多くの登山客が訪れています。

また、景勝地として知られている高瀬川渓谷や、その支流として村の中央を流れる葛尾川の一帯にも豊かな自然が残されているほか、ヤマメやイワナの宝庫となっており、多くの人々に親しまれています。

管内の仕事

葛尾村は全体の半分近くが国有林であるため境界線が非常に長く、境界の管理が重要な仕事となっています。また、村内は水道が整備されていないところが多く、生活用や農業用の水を必要としている人が多く、水源地としての貸付も多くあります。

境界の管理業務

また、スギ、ヒノキの他にアカマツ林が広く分布しており、最近では合板材としての需要が高まってきていることから、森林の整備を行いつつ資源を活用していくため、アカマツ林の間伐を積極的に行っています。

地域との交流

普段仕事をしている中で、かつて国有林の仕事を手伝っていただいたという年輩の方々と多く出会います。

また、多くの住民の方に、分収造林を通して森林の整備に参加して頂いています。

それゆえ、昔から地域住民の方と国有林との繋がりが深いものであったと思う反面、国有林野事業の変化から現在では、その繋がりが希薄なものになりつつあると感じられます。

国有林野事業を行っていくためには地域住民の方々の協力と理解が必要であり、普段から積極的に交流を持つようにしています。村内ではスポーツが盛んであり、私も週に一度、村の体育館でテニスに参加させてもらっています。

また、毎年8月には集落の盆踊り大会が催され、昨年は地域住民の一人としてその催しを手伝わせて頂き、交流を深めることができました。

森林の整備、保全はもちろんのことですが、このような交流を通して多くの人に森林に対する関心を持ってもらい、国有林のPRを行っていくことも、森林官としての重要な役割であると感じます。

日山（天王山）の山開き

私の視点
「林野がイヌワシと地球を救う」

新潟県イヌワシ保全研究会
代表　柳川　雅　文

イヌワシが消え去る日

イヌワシは北半球の荒地や低木地帯に広く分布している大型の猛禽類で、生息数は約５万つがい以上といわれています。日本・朝鮮半島・中国東北部には、既知の範囲では独自の染色体変異と夏緑林への適応をとげた可能性が考えられる貴重な亜種、ニホンイヌワシが分布しています。

20世紀末に確認されたニホンイヌワシの生息数はわずか２００つがい足らずで、さらに、ここ10数年から20年の間に消滅あるいは３分の２ほどに減少した地域もあって、野生での絶滅の危機をむかえています。

既知のイヌワシ生息地のほとんどが集中している本州では、主な分布域が東北北部、本州中央部、中国山地などに分かれており、このうち奥羽山脈中程から琵琶湖周辺に至る本州中央部が最大の分布域です。

この中に、関東森林管理局管内の国有林がすっぽり納まっています。管内からイヌワシが消え去る日は、この世からニホンイヌワシが消え去る日かも知れません。その日はいつか、筆者が行った存続可能性分析では、数十年から百数十年後と見積もられました。

森林整備の必要性

開発による生息地の減少、人やヘリコプターによる行動のかく乱と共に、イヌワシの危機の大きな要因とされるのが狩場の植生変化です。筆者らの解析によると、夏緑広葉樹林をスギ人工林に転換したところでは、狩りの利用率が４分の１～８分の１に低下していました。また密生した二次植生もイヌワシの狩りに適さないと、日本イヌワシ研究会などが指摘しています。大きな理由は、人工林や二次植生の大半が50年以下の若齢で、イヌワシの狩場である林冠ギャップが少ないことです。ギャップのある極相に自然に移行するには、今後百年から数百年はかかります。従って人工林や二次植生を整備しなければ、この世からニホンイヌワシが消え去る可能性が考えられます。

人工ギャップ上空で
餌をつかんで飛ぶイヌワシ

林野がイヌワシと地球を救う

新潟県イヌワシ保全研究会は、関東森林管理局　中越森林管理署に協力し、「イヌワシの生息環境を保全するための森林施業」に取り組んでいます。この施業は、密生した人工林に、イヌワシの狩場の測量結果を参照した２０×４０㍍のギャップを造成して狩場を確保し、天然更新が進んだらその隣の人工林部分に新しいギャップを追加する、このサイクルを、対象とする小班全体が混交林化ないし夏緑林化し、自然倒木が生じるようになるまで数回繰り返すものです。今では、同じ目的を持って取り組んでいる各地の経験を活かし、共生林型と循環林型の狩場確保方法を提案する、「林野がイヌワシを救う」キャンペーンを、「群馬イヌワシ生態研究グループ」・「猛禽類調査会（財）イオン環境財団助成」と共に展開しています。しかし、イヌワシの絶滅回避にかなうほどの数を整備するには時間が足りません。

折しも地球温暖化対策として森林整備が急がれていますが、こちらも現状では国家目標を達成できていません。そこで本会は各署の皆様に、イヌワシ生息地において狩場確保と温暖化対策を統合し、１㌶につき１～数箇所のギャップを時間をおいて追加し続ける、簡易整備手法のご提案を始めたところです。これからは、「林野がイヌワシと地球を救う」の気構えで、一層積極的な森林整備に取り組まれるよう希望します。また、イヌワシが生息する管内各県には、イヌワシ専門の野外研究者が必ずおられますので、ぜひ彼らとコンタクトをとるようお勧めします。

中越署スタッフとNGOの共同作業

新潟県イヌワシ保全研究会連絡先
iwhozen@mail.goo.ne.jp

「平成19年新潟県中越沖地震」による被災地域の林野に係る山地災害危険地区等の緊急点検への協力について

ヘリ上空からの被災地（柏崎市椎谷）

関東森林管理局では、今回の中越沖地震の対応として、新潟県からの要請を受け７月23日（月）から27日（金）まで、被害の大きかった柏崎市を中心に、新潟県が行う民有林内の山地災害危険地区などの調査に協力しました。

調査は、関東森林管理局本局、上越森林管理署及び中越森林管理署の治山担当職員共同の６人２班体制で、柏崎市周辺の山地災害地区や治山施設の点検を行いました。

一日の日程は、朝８時30分に調査本部となっている出雲崎町の森林組合に集合し、当日の調査箇所等の確認後、夕方４時まで現地調査を行い、その日のうちに調査結果を取りまとめるというものでしたが、初めて訪れる箇所もあり、現地の詳細もなかなか把握できず、５時の終業が７時、８時となることもありました。

そんな調査も終盤には、順調に進むことができ、大きなトラブルもなくどうにか無事に終了することができました。

現地調査

なお、今回の調査協力には、新潟県から林野庁、関東森林管理局に感謝の意が伝えられたところです。

（治山課）

調査結果の取りまとめ

一枚の写真

「会津磐梯山」

国道49号線を郡山方面から中山トンネルを抜けるといよいよ歴史の里、会津地方に入ります。

しばらく進むと、左手に猪苗代湖、右手には日本百名山のひとつに数えられる「宝の山」会津磐梯山がその端正な姿を現します。

現在の磐梯山は、猪苗代湖の北にそびえ立つ大磐梯（1，819㍍）を主峰とし、櫛ケ峰（1，636㍍）、赤埴山（1，427㍍）の三峰からなり、長い歴史の中で幾度となく爆発を繰り返した後、現在の姿となっております。

かつて、磐梯山の北側には、三峰のほかに小磐梯という山がありましたが、明治21年７月15日の大爆発によって山体崩壊をおこし、膨大な量の岩や土石が流れ出して北側山麓に点在する村々を飲み込むなど、甚大な被害をおよぼしました。

さらに、小野川や中津川など幾本もの河川が堰き止められたため、小野川湖や秋元湖、桧原湖をはじめとする無数の湖沼郡が生まれ、裏磐梯の景観が形成されました。

現在、磐梯山周辺は登山客やハイカーをはじめ、キャンプ、スキーなどで一年中賑わう観光の中心となっております。

興味のある方は一度お出かけになり、大自然の中に身を委ねてみてはいかがでしょうか。

（会津署　広報連絡官　太田邦紀）

発行所　関東森林管理局
編集　総務課
■TEL（027）210－1158
■FAX（027）210－1159